

# ミャンマーにおける竹資源利用 を考える



京都大学大学院地球環境学堂・農学研究科 柴田昌三

私の専門：景観生態学、竹生態学、環境デザイン学、里山資源管理学、等々

竹は学部生の時から研究：

- ・最初はササ類の**造園**的利用、次に竹類を用いた**緑化**を研究（これらは国内）
- ・1990年代後半から竹類の**開花生理**に関する研究（モウソウチク、チュウゴクザサ、*Melocanna baccifera*(インド・ミゾラム州))
- ・2000年頃から国内**放置竹林の再生**と**新資源利用**に関するアドバイスを各地で行う

40年以上前から国内の竹産業界と接点を持ち、かつての伝統的な竹産業とも接してきた。そこにはこのプロジェクトで言うところのナレッジが普通にあった。

- ・昭和時代の中頃、日本政府の依頼(命令?)によってこれらの**ナレッジを伴う技術移**出が東南アジアを中心とする諸国を対象に行われた。
- ・現在の国内竹産業の衰退理由をこの活動に求める老人は今でも多い。
- ・ただし、日本の竹（主にマダケ属）に関するナレッジはそのまま東南アジアに通用すると考えるのは大きな間違い **自然も生活も違う**

# 1980年代に日本からは村の竹細工屋さんが消滅 高付加価値のある竹製品製作中心に移行 ミャンマーで使える技術はどこにあるのか



# 京銘竹加工のための油抜き (京都は煮沸ではなく火あぶり)



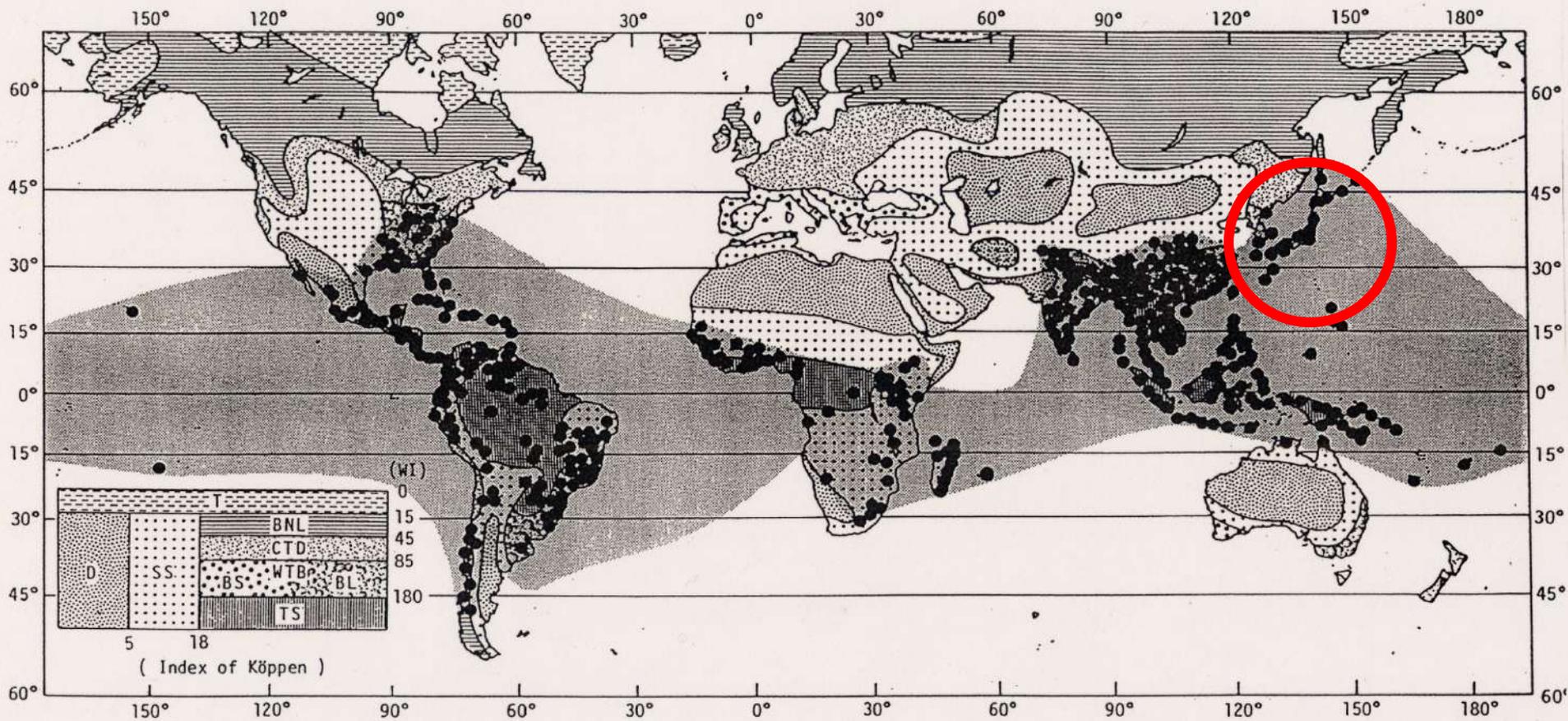
# 日本文化を代表する植物・竹の利用

## 建築への利用



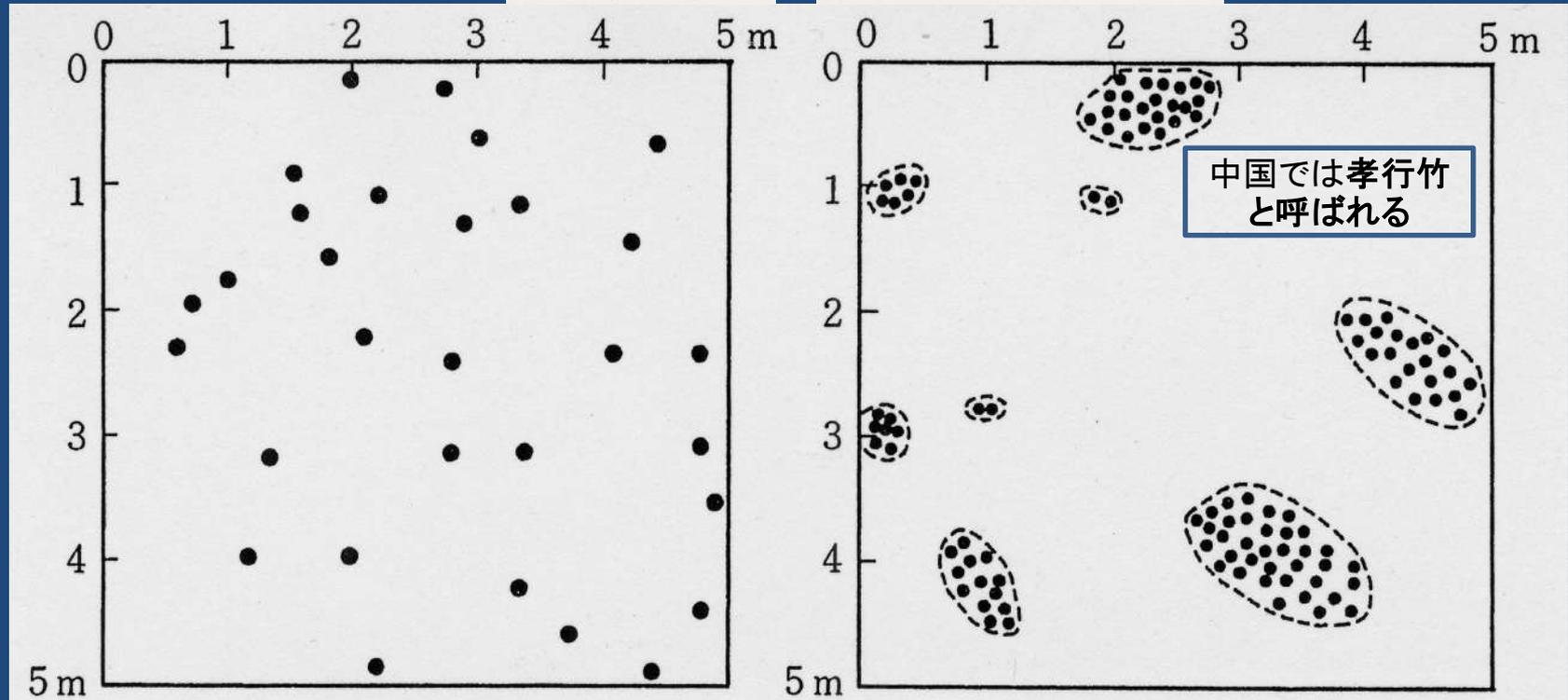
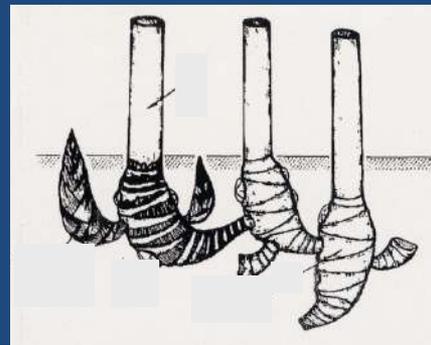
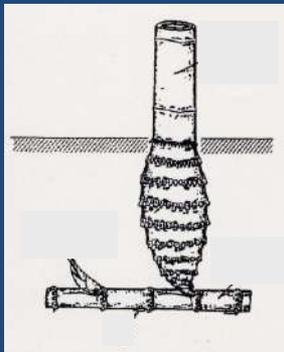


# 簡易窯による 竹炭生産



## 世界の竹類の分布と気候帯(渡邊 1987)

日本は竹の国という認識があるが、世界的にみると、その分布域は北の端にあたる



温帯性の竹(左、短軸型、日本)と  
 熱帯性の竹(右、連軸型、ミャンマー)の  
 地下部の形態の違い (渡邊)

# ミャンマーでみる竹利用



# バガンの漆器作り



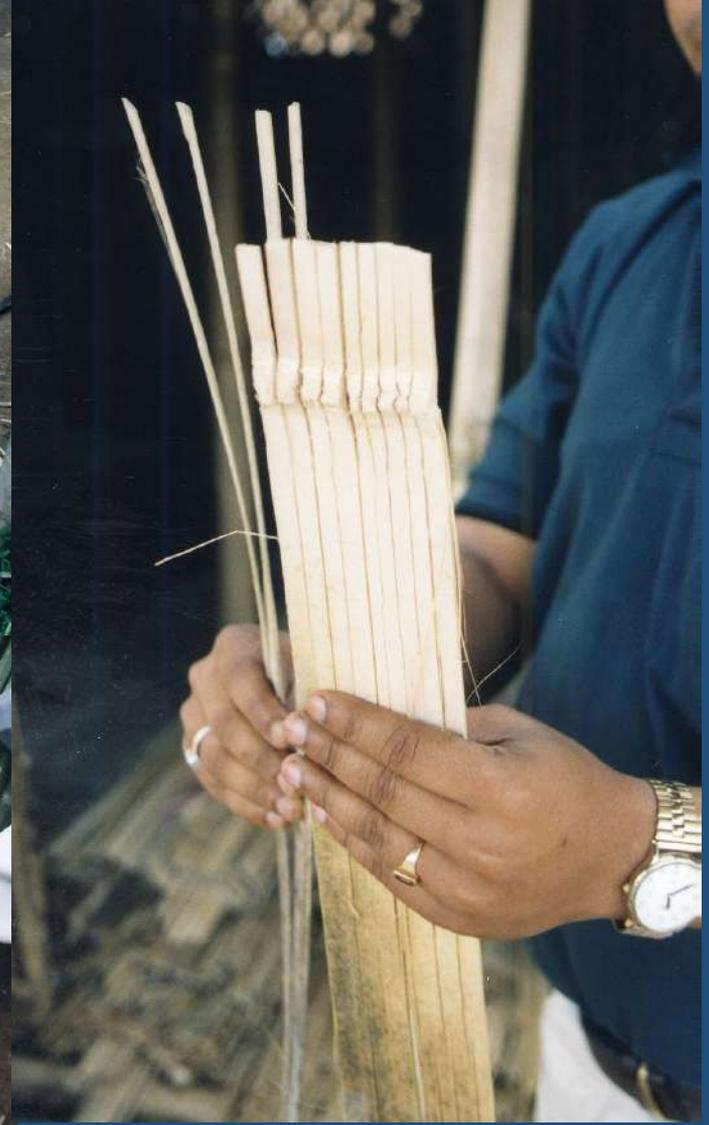
# ミャンマーを含む東南アジアは世界でもトップクラスの竹が種数、量ともに多いエリア



**ChiePro**  
Challenge to innovative Eco-life Promotion

- ミャンマーだけではなく**周辺諸国**にはさまざまな竹資源利用やそれに基づく竹文化がある。
- 国境を接している国々(インド北東部、中国雲南省、タイ、ラオス、バングラデシュ)には**類似の竹との生活**が豊富に存在している。
- これらの地域は、日本では**照葉樹林文化地帯**としても認識される場合がある。
- 日本と同様に竹は**竹材資源、食料資源**として貴重であると同時に、**焼畑農業**の適地、高タンパク源としての**虫**が取れる植物としても認識されてきた。

# *Melocanna baccifera* の稈は伝統的の家屋の貴重な建築材料 (インド・ミゾラム州)



# インド・ナガランド州 州都キサマの民族村



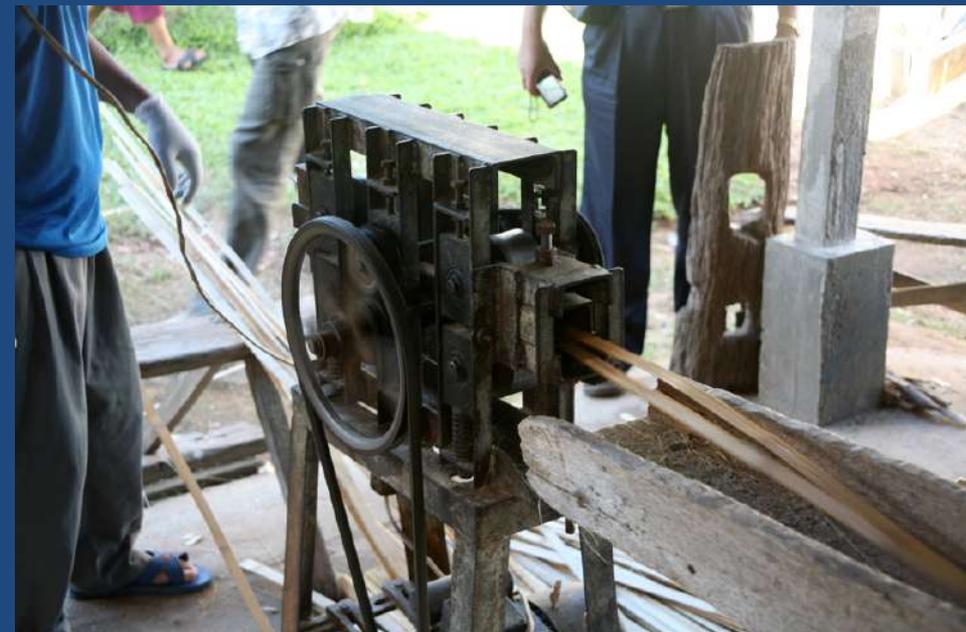
# インド・アッサムの流送による竹材集積



# インド・トリプラにおけるJICAの試み



# タイにみるさまざまな 竹資源利用



# タイ・カンチャナブリ の竹利用



# インド・トリプラ州政府による竹加工技術の講習



# 日本の竹ナレッジをミャンマーでどう使うか

- 伝統的竹文化がある地域であることを踏まえたある意味対等な(上から目線でない)つきあいを
- 自生種に関しては、使い方や加工方法は現地の人の方がよく知っている。
- 使える竹の種数が半端ではない。(日本ではマダケ属中心)
- もちろん、材質も多様である。応用力のある人材が必要。
- デザインも下手をすると現地の人の方が優れている場合がある。
- 周辺諸国(特に国境のすぐ外側の地域)の状況も把握する必要がある。
- 中国雲南省、インド北東諸州、タイには少なくとも参考となる事例が多いし、そこに日本のナレッジを融合させる努力が必要。
- ミャンマーだけをみていてはだめではなかろうか。あるいはミャンマー国内でも地域によって異なる民族がおり、その違いは大きいはずなので、拠点とする地域のより深い理解が必要。